

越後小島谷・久須美家に関する書画

—— 歴史環境を主眼とした鑑賞教育

岡村 浩

一、特別な歴史環境

平成二十七年六月十二日から二十一日まで新潟県長岡市小島谷地区で「久須美家ゆかりの文人墨客展」が開催された。同市「和島地域の宝 磨き上げ事業」の一環として公的機関主導によるもので、この種の企画で古い書画が展示のメインにおかれることは稀であろう。筆者は、企画準備の段階から参画して運営に当たった。作品調査・出品作の選定・解説キャプションの作成・解説冊子の執筆・記念講演・会場設営につき関与を果たした。これらの行程には新潟大学書表現コースの学生中「地域実践研究Ⅲ」の聴講者が授業の一環として関わり、鑑賞には「現代の書」「ビジネス書道入門」聴講者凡そ百八十名が参加した。

小稿では、本企画の概要と特色につき、事後に得た知見も加えつつ、伝統文化継承の道筋を整理しておきたい。

まず「地域の宝磨き上げ事業」の説明をからめた展示の趣旨に関し、和島の宝地域づくりネットワーク会議代表・羽鳥仁一氏が綴った「ごあいさつ」文（解説冊子所収）があるので、一部を引用したい。

この展覧会は「地域の宝磨き上げ事業」の一環として行われるものです。当事業は、各地域の宝に関わる活動をよく継続している団体を支援することを目的としています。地域住民が地域の宝に「愛着」と「誇り」を

もってさらに磨き上げることにより、地域の宝がより光彩を放って次世代に引き継がれ、ひいてはそれを核として魅力的な地域づくりが進められることを期する事業です。

和島地域においては、「良寛・貞心尼とはちすば通り」、「越後鉄道と住雲園」、「村岡城址周辺」を事業の対象としました。そして《和島の宝地域づくりネットワーク会議》が包括的事業主体となり、各団体と連携し、また各団体相互の協力関係をおしすすめながら事業展開をしたいと思っております。多くのみなさまより事業参画をたまわりますようお願い申し上げます。

タイトルにあります「久須美家」は遠く曾我兄弟の兄・十郎を祖とし、14世六郎左衛門政幸から28世東馬までここ小島谷の地を生活の拠としてまいりました。今回の展示は23世太宰祐之の代から東馬の代までを中心としたものです。この間、戊辰戦争の折には会桑軍の本営とされたため、敗走する会桑軍より火を放たれその邸宅は灰燼に帰しました。また、27世秀三郎と28世東馬までの遺徳を偲び、その事績を後世に伝えるため県知事を会長として結成された「久須美父子遺徳顕彰会」が、記念誌刊行のため整理した資料や珠玉の文物も、それらを持ち込んだ印刷会社で再び火災につつまれる悲運に見舞われました。それ故、今回の企画展は「久須美家」を知る格好のよすがになるのではないかと思います。また、本展を機に、さらなる「久須美家」ゆかりの情報に接することが叶うならば幸甚に存じます

す。

元々良寛墳墓の地として良寛の里美術館が和島にはあり、書画愛好家には知られた地である。「越後鉄道と住雲園」とは、小島谷地区の旧族・久須美氏の27・28代が「鉄道王」と称される、県下の著名な線を複数敷設する中心になった人物だった。その屋敷は江戸期以降、「住雲園」と呼ばれ、遺跡は今日まで保存がはかられてきた。山間とふもとに広く広がる田園、遠くに弥彦山を借景する風光明媚さが讃えられた。ここが最も輝いたのは、大正二年、越後線開通式祝典が多くの来賓を集め開かれた時で、「午前十一時新潟芸妓の踊りから始まった。爆竹が響く、洋楽が鳴る、来賓一同余興場に集まる。新潟追分とおけさ節踊りが記者には興味深かった。当時の紅裙連四十余名という。安藤知事が観客席にあって、当日の紅裙連の立見するを傍に呼んで両側に腰かけしめ、美人の中央に待ったなどは主客内寛いだ愛嬌ぶりが嬉しかった。久須美若君（東馬）一寸色合いの異なった山高帽を冠って、令婦人令嬢を特に一番前の椅子に勧めていたのが目を引いた。十二時半に踊りも終わり園遊会に移った。」と、その有様が新聞に報じられている。

和島地域の宝磨き上げ事業

久須美家ゆかりの 文人墨客展

日時 平成27年6月12日(金)～21日(日)
午前10時から午後4時まで(21日は午後3時まで)
会場 住雲園
〒954-9155 長岡市小島谷2-1-56番地の1

1 行事内容
① 亀田麗子、大森詩仏、杉越雨、日下部鳴鶴、
副島輝臣、中林梧竹、阪口五峰等を
中心とする書画資料 約25点を展示

2 記念講演会
6月21日(日)
午後1時から午後2時30分
講師 新潟大学教授 園村鉄琴氏
演題 「久須美家を中心とする」
※講演終了後に展示品の解説を行います。

3 パンフレット刊行
問合せ先
和島の宝地城づくりネットワーク会議事務局
(長岡市和島支所地域振興課内)
02558743112

和島地域の宝磨き上げ事業
久須美家ゆかりの文人墨客展
住雲園

図1 案内状葉書

二、久須美家のあらまし

久須美家の庭に目を転じる。石に刻まれた文字、いしづみが三文(二基)建っている。

「昭和四十七年池田直吉氏は公共のため利用するようにと所有の土地建物一切を長岡市に寄附された。池田氏は明治十九年長岡市本町一丁目に生れ長岡中学校卒業後大阪市で貿易商として活躍昭和十七年から小島谷のこの地に暮された。寄附地は池田氏が昭和の初めに元久須美東馬氏所有地を買取られたもので邸内の庭園を住雲園と称し久須美宗家先祖の築造になる名園である。長岡市はこの縁の地に池田氏の篤志を録し後世に伝える。昭和四十九年三月 長岡市長 小林孝平」

「右長岡市が所有された本庭園家屋並に土地山林49333.27平方メートルは地元の故を以て長岡市長日浦晴三郎氏の御英断により長岡市議会の御同意を得て和島村が寄贈を受けたことを録す。平成四年三月三日 和島村長 清野精合」

読めば、長い家史を持つことと、やがて人手に渡りそれが長岡市に寄付され、さらに元々のふるさとである旧和島村に戻ってきた経緯が理解でき

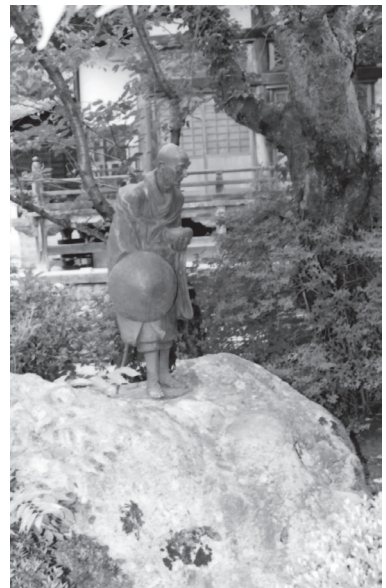


図2 隆泉寺良寛像

る。

和島支所によって編集刊行された『住雲園と久須美家の人々』（H19刊）をみると、17世紀半ばの同家14世から現30世当主にいたるまで、各時代の様子が要を得てまとめられている。簡潔書きにしてみると、○江戸期、庭園「住雲園」が享保年間（一七一六～一七三五）の築庭に始まり、昭和九年に文部省調査で名勝指定を受けたこと。

○初代曾我十郎祐成から30世にいたるまでの紹介。旗本及び代官職にないい、幕末には勤皇の志が篤く、京の宮家に仕えた人物が出た。

○とくに27世の秀三郎祐啓・28世の東馬祐徳父子は衆議院議員として国政に参加し、中央の名士と交流を持ったこと。石油や銀行、新興事業の多くに着手する中、県下の鉄道主と称される程、今日の越後線をはじめ斯界の発展に寄与したこと。

これらの記述の行間に、江戸の四大詩家を招聘したことや、大正期の新潟を代表する文人でもあった政治家・阪口仁一郎（号・五峰）との関係などにも触れている。つまり、久須美家一族は中央と地方を結ぶ地域振興に大きな足跡を残しつつ、歴代当主中、文墨の世界に興味を抱く人々が出たのだった。とくに27・28世父子について記す。

久須美秀三郎

嘉永三年（一八五〇）生まれる。明治九年久須美家27世として家督を嗣ぐ。県議会議員、副議長を経て明治三十五年以降衆議院議員に二回当選。北越鉄道（現越後線）の開通に尽力し、大正二年に白山柏崎駅間全線営業を開始。また、越佐新聞、北越新報の経営にも携わり、新潟鉄工所、長岡銀行、日本石油等の各社取締役を務めた。

久須美東馬

明治十年（一八七七）小島谷に生まれる。父秀三郎と鉄道開発事業に心血を注ぐ。大正二年に越後鉄道（現越後線）全線開通。その後、大正五年参宮線（現弥彦線）完成。大正十四年西吉田東三条間、昭和二年東三条越後長沢間完成。同年越後鉄道が国有化される。大正四年と六年に衆議院議員

に当選。また、私財を投げ打って弥彦公園の造成に自ら陣頭指揮し、五万坪の大公園が完成。

冒頭紹介したいしぶみの残る一つは、杉聴雨詩書碑である。県下にその遺墨は割と多くみうけられるものの、書碑は大変珍しい。碑文を引用する。

「明治四十三年八月過久須美氏住雲詩屋淹留數日 壁有詩仙老人題詩 乃傲矚賦之 老松囲繞世塵空 清冷泉從石髓通 林下欽君養仙骨 優遊永住 白雲中 聴雨杉重華」

かつて大窪詩仏の詩書にちなみ本庭が住雲園と名付けられ、それを知った聴雨が詩書に詠まれた通りの名園であることに感嘆して筆をとった旨が綴ってある。「淹留」は長くとどまること、「傲に矚う」とは謙遜しつつまねをすること。次に、詩仏と聴雨の略歴を紹介する。

大窪詩仏（おおくほ しぶつ 一七六七～一八三七）

常陸国の医家の子。名は行、字は天民。山本北山に儒学、市川寛齋に詩を学ぶ。遊歴を好み、地方にも門人がいた。墨竹画を得意とする。

杉聴雨（すぎ ちようう 一八三五～一九二〇）

山口藩士の次子。名は重華、通称孫七郎。吉田松陰の薫陶を受け幕末国事に奔走し、維新の功労者の一人になる。子爵・枢密院顧問官。細字の詩書を得意とする。

ところで、聴雨が目にした詩仏の詩書は残念ながら今日伝世しない。昭和初期になると、この名家自家運が傾き、所蔵骨董の売立も行われたようである。少しまとめてみると、大正二年前後が、当家の絶頂、昭和三年売立目録、昭和十七年頃長岡人の池田氏が邸宅を取得し、住む。昭和四十七年長岡市へ池田氏が邸宅を寄贈、平成四年和島村へ長岡市が寄贈、そして和島村が平成十八年、長岡市と合併、このような流れを経た。

それでも少しは往時を語る遺品もあろうし、同家の周辺にまで目線を広

げれば、小島谷一帯を訪れた文士の顔ぶれが浮かび上つてこよう。今回の展示は、久方ぶりに一般公開される邸内に「久須美家ゆかりの文人墨客展」と冠した表題通りの書画作を並べ、人々と中央の名流文士との往時の交流をしのぶ機会となった。以下主な作家の作品を挙げていく。

三、江戸の文人たち

江戸期の人ではまず亀田鵬斎を挙げたい。

亀田鵬斎(かめだ ぼうさい 一七五二〜一八二六)

江戸後期の儒者・漢詩人。一八〇九年から三年余り越佐を遊歴。良寛との逸話を数多く残す。

その文化六年(一八〇九)秋から同八年夏まで足かけ三年に及ぶ越佐遊歴の足跡の骨子は、ほぼつかめている。かつて筆者は『亀田鵬斎総集』(日19刊)に六百点余りの遺墨を集めたが、就中、住雲園で作詩したと伝わる作がある。

「已に穿つ千疊の雲、来り坐す万仞の巔、風は塵寰(俗世)に非ず、積翠一天よりす、日は沈み蒼屏浄く、霞は蒸り(たちのぼり)丹崖(夕焼けの山)鮮か、万籟余響を絶ち、一鳥の往還なし、夜は深く山いよいよ寂しく、心は清く眠をなさず、また有り孤輪の月、吾が両袖の間を照らす 鵬斎興」

残念ながら紙面に制作年をとどめていないが、縦長の字形と程よく始まっている行書の筆意から、越後路の作とみてよい。

先掲の久須美雪堂・東馬と親しかった代議士で詩書に巧みだった阪口五峰は、その著『北越詩話』(丁7刊)の上巻・巻五で久須美一族に触れ、23世逸翁の代、柏木如亭・鵬斎・市河寛斎・大窪詩仏等が長期逗留した旨を綴っているが、証左となるものの一つが本作である。

次いで今名前を挙示した中で、大窪詩仏を紹介する。

各地を巡行した行程は、詩集『詩聖堂詩集』『再北遊詩草』に読める。

越後に関する記事をみると、燕・三条・栃尾・柏崎・高田の県下広域に及ぶ地名が登場、小千谷では舟下りをしつつ茶を喫したり、出雲崎で客死した南画家・剣雲泉との接触をしのぶ詩、そして「題住雲書屋」と題する詩をはじめ、計三詩が少なくとも久須美氏関連のものとして認められた。これらの刊本中の事績があったことの決定的証拠となるのが、本展出品作で「朝霞如火抹山前 忽見雲騰風又顛 一陳驚雷來震地 萬珠飛電亂篩空 南人不慣北方候 秋月故著冬日綿 化兒調客從渠著 其奈農家未獲田 丙子閏八月廿九在越小島谷大雷雨電 詩仏老人大窪行」と記す。若干文字の異同があるものの、「閏八月廿九日記事」と題して、刊行詩集中収録されている。文化十三年(一八一六)のこと。「抹」は塗りつづす、「篩」はふるい。詩仏といえば墨竹の妙手で、書は大抵くずし字である。本作のような楷書体は殆どみることがなく、鵬斎の楷書同様江戸の版本活字を想起する一種の「書卷の気」が看取される。また何より詩の内容が面白い。雲行きが怪しくなり雷が地を震わせ、電がふるいにかけたようにバラバラ降りだしたことにたまげ、自分を南方人にととえ、北国の気候に不慣れである身を詠んでいる。

また『北越詩話』に載る逸翁時代、書屋の壁にあった詩仏の題詩に

「直従海岸別 行入乱山中 乱山高下過 一徑彎環通 夾徑古松樹 鬱葱綠凌空 出林忽有邨田園接西東 秋深秔稻熟 笑語見年豊 中有詩人住 柴門鎖竹叢 兄弟如連璧 不負古人風 聞我遠來訪 灑掃煩家童 下榻薦珍羞 禮貌一何隆 厨釀如油綠 盤肴似花紅 殷勤把杯勸客愁 春雪融 平生怕塵事 雲間避弋鴻 今日過君飲 休笑氣吐虹 誰道孤邨裏 與壺中天同 我見君兄弟 胸中幾雲夢」

があったという。さらにもう一詩、同じく逸翁の有した柏木如亭詩に唱和した詩仏を付記する。

「吟筇看風月幾辛苦 囊裏金錢一欠伸 不識何時尋旧約 池頭新卜草堂鄰」

早くに如亭作は失われ、詩仏もまた今日遺墨の確認は出来ない。ただし、ここに紹介した三詩は全て『詩聖堂詩集』(巻四・五)に収められている。客中作を詩仏は手控えし、集中の詩として世に残したのである。



図6 同右



図3 邸園風景



図7 洋間の展示



図4 入口の展示
日下部鳴鶴・副島種臣書類



図8 和室での鑑賞



図5 ガイドによる説明

『北越詩話』の引く三詩目は原著と比見してみると、随分省略されている。『詩聖堂詩集・初編上』の所載詩を書き下し文にしてみた。

「住雲書屋に題す

直ちに海岸より別れて行き乱山の中に入る、乱山高下して過ぎ、一徑穹環して通ず、挾径の古松樹鬱葱として、緑、空を凌ぐ、林を出づれば忽ち軒有りて、田園、東西に接す、秋深く秔稻熟し、笑語に年の豊かなるを見る、中に詩人の住む有り、柴門、竹叢に鎖せり、兄弟は連壁の如く、古人の風を負はず、我が遠くより来訪するを聞き、灑掃、家僮を煩はず、榻を下り珍羞を薦む、礼貌一に何ぞ隆なる、厨釀は油緑の如く、盤肴は花紅に似たり、慇懃に杯を把りて勸む、客愁、春雪のごとく融く、平生塵事を怕れ、雲間、弋を避くる鴻、今日、君を過りて飲す、笑ふを休めよ、気の虹を吐くを、誰か道う、孤邨の裏と壺中の天と同じと、我、君が兄弟を見、胸中、幾くの雲夢ぞ」

「小島谷説如亭山人題壁之作有感

吟筇して看尽す、荏城の春、興に乗り来遊す、越海の浜、命を將つて花を乞う、寧ろ地を舂んや、詩を売り食を求む、毎に人に依る、客中の風月は辛苦に幾く、囊裏金銭は欠伸に一なり、識らず、何れの時か旧約を尋ねるを、池頭、新たに卜せん、草堂の鄰」

なお、如亭のことも簡述しておく。

柏木如亭（かしわぎ じよてい 一七六三〜一八一九）

市河寛齋・詩仏・菊池五山と江戸詩壇の四家と称される。神田生。幕府に仕える大工棟梁の家業を弟に任せ、放浪詩人として自由な生活を送り、京の借家で生涯を閉じた。中でも新潟の逗留を好み、酒と女色に陥る。やがて町を追放され、次の出雲崎では地方芝居に出演したり、また芸妓を相手にした。「新潟の寺町へ」とつぶやいたのが遺言だと、巻菱湖の書簡にあったという。

四、明治以降

時代は明治に転ずる。当代の三筆とうたわれる書の第一人者・日下部鳴鶴の足跡が残る。

日下部鳴鶴（くさかべめいかく 一八三八〜一九三三）

明治・大正を代表する三筆の雄。滋賀生。中国金石資料に基づく新しい書風を生みだし、全国に多くの門人をもった。各地に千余りの書碑が建つという。

この鳴鶴が、「陽谷館 庚寅晩秋為雪堂雅君囑題 鳴鶴日下東作」と揮毫した書額が伝世するのである。本作は一度流失したものが奇跡的に、住雲園に戻されたという。明治二十三年秋、五十三歳作。落款に雪堂の依頼に応じた書であると読める。紙ではなく上等な紬本を用いた佳品。横画に裝飾的な波磔をもつ隸書で、好んで臨書した漢代の石碑である礼器・張遷碑風が色濃い。「陽谷」とは、明るく輝く太陽の昇るところの意味で、ものごとのきざしとして学塾の名にふさわしい。

後半生全国を漫遊した足跡は、弟子の井原雲涯編『鳴鶴先生叢話』（T14刊）に出遊の年ごとの旅程が記録しており、明治二十三年の条をひくと、

「二十三年 八月塩原を通り与板を経て新潟着、村上、新発田、水原等に遊び新潟に帰り、三条、与板、長岡、小千谷、深沢等を廻り十一月帰京。」

とある。和島小島谷の地名はみえないが、このように確かに来越をしており、書額も客中作の一つであったのだろう。筆者は『日下部鳴鶴遺墨萃編』（H16刊）を編集、90点を集めたが、明治二十三年の越後路作は比較的多く残っていた。

続いて鳴鶴と同じ三筆の一人、中林梧竹についてである。

中林梧竹（なかばやし）ごちく 一八二七〜一九一三

明治の三筆の一人。肥前佐賀生。明治期いち早く中国に渡り、たくさんの珍しい書道資料に接した。「五合庵」木額や「良寛上人伝碑」を書くなど良寛顕彰史上初めに登場する書家でもある。

住雲園近くの久須美氏墓所に、「久須美祐伸君墓誌銘」が建つ。祐伸は21世祐良の三子、明治九年二月没。この碑を梧竹が書いているのである。撰文の重野安禪の年月によると明治四十一年十一月、この時梧竹八十二歳。高令であるが、翌明治四十二年四月、ひとつぶだねの実子・活輪が同じ三島郡内の与板病院で病没している点に注目したい。与板には出品作の六曲屏風をはじめ梧竹遺墨の大作名品がいくつかみられ、やはり特別な土地とみてよい。実子を見舞ったり知己を訪問する途次、本碑の揮毫に着手した可能性がないわけではない。

書碑はやや扁平体の楷書になり、同趣の書きぶりは大変珍しい。なお篆額は大隈重信によるもので、この点からみても久須美氏の名が中央に通っていた様子が窺える。梧竹に珍しい楷書碑を書かせた動機もまた、名家の系譜の記録に意気を感じたようなことがあったのかもしれない。資料として碑の全文を巻末に付載する。また、三島郡長を明治二十五年一月から同三十年八月まで長くつとめた肥田野畏三郎（号錦川）の詩集をひもどくと「清輝館和梧竹翁之韻二首 在与板」と題す作がみえる。高樓での洗塵、山色湖光の翠、曉霧、香風が水辺の簾を吹き動かす情緒の中、梧竹を囲み時人は避世を楽しんだらしい。ちなみにこの清輝館とは、今の与板町ふれあいセンターがある辺りにあった妓楼だという。

興味深いことに、錦川詩に久須美雪堂を悼む題詩があった。「三十年遠旧識。雲樹聘懷悠。国利兼民福。経営又画策。名門誉益広（以下略）」と五律に、三十年にはなろう長い交誼をもち、国と民のためになる公益事業を興し名門の誉はいよいよ広まった、と如何にも郡長らしい地元名士への評を綴っている。当時の政財界の人々は詩書画文墨の世界をもつてつながりを有し、技量の巧拙よりも人格の高邁さを優先して互いを尊んだ。その一コマが三島郡地域の与板・小島谷地区にもあった。

さらに当地三島郡の郡都のおかれた与板にみる、中林梧竹の足跡を点描して参考にしたい。

明治二十二年（一八八九）六十三歳。九月中、与板町へ。徳昌寺で「示衆一則」大幅を書く。漢字と片仮名混じり長文による大変珍しいもの。

同年十月十九日、同じく徳昌寺にて特筆大書の揮毫。都野神社に建つ「進斎八尾先生碑」（三・五メートル）を書く。当日書画会及び懇親会を午前八時より開く。参加費三十銭。町長の山田泰梧・大橋小左衛門・三輪為次郎・平沢甚九郎・富取北川等廻船問屋主人や名士が世話をする。

明治二十八年（一八九五）六十九歳。春、仙台へ。秋、来越。長岡与板三条を歴遊し、九月二十二日新潟市内着。医学町通・山口旅舎へ。

九月二十八日濁川村真嶋家へ。「樅堂」（額）や臨書帖等を同氏のために書く。この頃「良寛上人伝碑」を書く（碑面に九月とある）。建碑に関し、「聊書小伝」に始まる詩書の二幅が伝世。「大古山人詩碑」もこの頃の作と思われる。

十月八日には山口旅舎へ入る。その後、西越村の画人・諸橋湘江等三島郡出雲崎方面と交流があったものか。諸橋氏と親しい三島郡桐島村・小黒桐園（一九三一没）のところに数点作品が残る。「桐島村立尋常小学校」木額校名は梧竹揮毫と伝わる。

十月二十日過ぎ、北蒲原郡乙宝寺（現胎内市）そして岩船郡羽ヶ榎村（現荒川町）の素封家・国井伴之丞宅へ。

十一月まで新潟市内。次いで三条・衆楽館辺りに滞在するか。のち与板へ行き、大橋小左衛門と会う。

十二月三日帰郷の途に着く。

梧竹と同じく九州の人、副島種臣の書碑もまた付近に残っている。

副島種臣（そえじまたねおみ 一八二六〜一九〇五）

佐賀生の政治家。漢学に通じ豪壮雄大な書は書家の作に勝る評価を得る。蒼海と号す。

書は「鹿嶋神社」社標。右側面に「副島種臣」の自署、計八文字。そして左側面に「明治三十七年四月奉建 久須美作之助」と別筆を刻入。紛れもなくこれは久須美氏一族の肝入りで建つたものである。副島書は、少し隷意を含む重厚な筆致の書で、凡庸な書家の書の遠く及ばない、維新の元勳たる貫録と広く深い教養を有した人となりが一見して表出されている。

ちなみに、副島の来越の具体的な内容は未確認である。書碑はこの他、①「表節碑」の篆額三字。明治二十七年二月、新発田諏訪神社に建つ。文化十四年に端を發し、父の仇討ちを三十余年かけて行つた久米幸太郎を頌えるもの。一行目に「伯爵副島種臣公篆額」と別筆で刻む。

②「生田秀大人之祠」「菅原朝臣種臣書」と二面に書く。明治二十七年六月、柏崎日吉神社に建つ。政友会政治家丸田伴二が仲介し、素封家縮商が中心になって建てる。生田万は館林生。天保七年来越、翌年細民救済のため柏崎陣屋を襲い、自刃。義民として仰がれる。副島の書は懐の引き締まった楷書。

③「御島石部神社 從二位伯爵副島種臣書」と楷書で正面に副島の書を刻む。側面に「明治廿九年六月 寄附 山岸喜藤太」と別筆で刻む。石地に建つもので、地元の素封家が寄附者として名を残しており、小島谷の例と同じである。

④「本間君碑」の篆額三字。久須美逸翁の孫、雪堂の弟、寺泊の巨族・本間氏を継いだ弥平（号蒼涛）の生涯を刻む碑文。寺泊密蔵院に建つ。

他では、新潟の旧家で趣味人・古山文静が北陸巡行の休憩所にもなった自邸を題材に、当時の貴顕の士の詩歌を収録した『日長堂清興』（M25刊）の巻頭に、「前參議大木副島両公題字」と説明を付し、「日長 古山氏 種臣」と草隷体二字を載せる。同種の刊行の例は、他にも散見されるであろう。

全国に建つ書碑は少なくないと思われるが、これまで調査結果はまとめられていないし、本県と副島の接点に触れたものも皆無であった。来越作ではなく、建碑の背景には地域の有力者が周旋をした節が碑面に読み取

れ、久須美氏の関与もその一つである。

この副島書「敬徳書院」木額が、出品作中白眉のものである。出雲崎の地主兼廻船問屋・佐野氏は文書古典籍を集めていた。その荘厳な文人門に掲げられたもの。代議士をした主人ならではの、つてによる揮毫依頼だったのだろう。

五、むすび

おわりに、久須美一族の書画に少しく言及する。

『北越詩話』には、23世・祐之（号逸翁）を主とし、付録に祐明（逸堂の後代・号霞外・通称三郎）と祐直（逸堂の支族）の遺事を載せる。

祐明の跡を継いだのが秀三郎祐啓（号雪堂）で、『北越詩話』の著者阪口氏は彼を小島谷に訪れ取材を行い、この家の諸事を記録した。

まず、「高邸に拠りて広い厦（屋根をかぶせた家）を架し。茂松苞竹。鬱然陰を成し。其下、田疇に平臨し。弥彦角田の二峰、青を送りて座に入り。宛然一幅雲林高陰の図。其堂題して住雲書屋といふ。」と、あたかも一幅の山水図をみるようだ庭を嘆賞する記述から稿を興している。また

戊辰の役に際し、賊軍の本営にされ与板・出雲崎の官軍と対戦後、退却の時火を放たれた焼け残りの老樹の皮を五峰に示したという。現在の家屋がのちに建つたのと同様、古い時代の遺物は伝わらない。今回、かろうじて雪堂及び交流者の書画が紹介出来たのみである。

①雪堂一行書（T9・古稀作）

②諸橋湘江山水図（T9作・雪堂への為書）

③雪堂二字作（T15・喜寿作）

④大竹貫一書（S17作）

⑤雪堂山水・禽獸図（無落款）

⑥雪堂墨竹図

④作は子の東馬の代のもの。これらは地元の要請で揮毫依頼を受けた際の習作、もしくは自娛、手すさびの画作ばかりである。マクリの状態で箱に収納されたものの中から一部を展示に供した。何れも書き急いだ雰囲気

のない温雅な趣のもので、大正二年九月の越後鉄道完成を祝う邸内園遊会の華やかな新聞記事に何う家柄と符合する。

他、上桐村の旧族・小黒雅太郎との交流を示す作等も見出せた。今回の展示を機に、元々多く地元の人々に書き与えたであろう雪堂の遺墨の発見を期待したい。

六、資料

文末、久須美氏の制作した主な書画を中心に、展示作の簡単な解説を付録する。鑑賞の一助として会場で用いた。新潟大学「教育実践総合研究」 「地域実践研究Ⅲ」の授業の一環として、学生と展示の準備と運営をしたものの一部である。

久須美雪堂 二字書

「真誠 大正十五年丙寅元日 七十七叟 雪堂」

小ぶりながら「誠」字のはね上げなど痛快な覇気を示す。やや薄墨である点も、しつとりとした奥床しさを覚える。

落款の「丙寅」は十干十二支の組合せでとしを表すもので、すぐ上に書いてある大正十五年（一九二六）と同じ意味。

七十七、即ち喜寿を迎えたとしの元日、試筆（書き初め）として制作した一枚。「叟」は老境に入って以降の「歳」と同じく用いる。

久須美雪堂 水墨山水図

署名はないが、雪堂の習作である。自娛のために制作したもので、平素の慣習に風雅の道が自然に身につけていたことを物語る。

手前の松葉をこまかく描き、中央の松は簡潔に描いて遠近感を表す。向かい合う山の肌は、短い横線を重ね描出する中国宋代の著名な文人・米芾の考案した「米点」を用い、江戸以来の流行を自分のものにしていく。

曲水の大河は描き残した余白で表現し、上方の天空とつらなり、上下のスケールを大きくみせる。

このように描出構図何れも中国の文人のよくした型を踏襲した伝統的、かつ一般的な内容と評価される。

久須美雪堂 墨竹自画讚

「清風知有待 辛亥八月中浣 雪堂」

竹が左方から吹いてきた風でしなやかに揺れている。「清風を待っているようなものだ」と詩書にあるような構図である。このように絵の補足説明をする左方の書のことを「画讚」と称す。

竹は古来聖人君子にたとえられる高潔の象徴。日中ともに詩画の好題材にされ、また画技の入門の第一歩として多作される画題でもあった。

「辛亥」は明治四十四年（一九一）、 「中浣」は中旬のこと。

日下部鳴鶴 書額

「陽谷館 庚寅晚秋為雪堂雅君属題 鳴鶴 日下部東作」

江戸後期、久須美家の開いた学塾名三字を書く。「陽」はひ・ひので・明るく高く輝く太陽。ちなみに「陽」は元来、日の当る明るい丘のこと。

「陽谷」の二文字で、太陽の出ている所の意味。ものごとのきざし、出発を思わせる佳句をまなびやに命名したのは、江戸後期にやって来た儒家・亀田鵬斎とされる。

筆者鳴鶴は、それまで邦人が学ばなかった中国古代石碑の拓本をテキストとして臨書（先人の書跡を写し、よいところを学ぶこと）に努め、新たな書風を展開した。本作も漢代の礼器碑（一五六）や張遷碑（一八六）を学んだ節の窺える字形をみせる。横画の終筆の装飾的な波型のはらい（波磔）をもつ隷書である。

落款の「庚寅」は明治二十三年に当り、弟子の井原雲涯がまとめた『鳴鶴先生叢話』に取められる全国漫遊録をひもとくと、確かにこのとし越後に

やつて来ている。ただし本の記載に「小島谷」の地名は含まれず、本作によつてこれまで知られない旅の動向の一端が明らかになったともいえる。紙ではなく特殊な絹目・統本を用いた旦那好みの作。

諸橋湘江 水墨山水図

「松鶴高士 庚申秋日写於雲烟養寿山房南窓下 以奉祝雪堂久須美大兄古稀寿 湘江諒」

画面中央に勢いよく滝（瀑布）の流れる様子が、高士の足元の水の描線にみえる。杖を持つ高士の見上げる目線の先には、滝に沿って上空に舞う一對の鶴。杖ぶりのよい松葉に姿が見え隠れするさまをじつと見守っている。

高士が世俗を逃れ、滝を楽しむ姿を描くいわゆる「高士観瀑」図である。

制作者の諸橋湘江（一八五八〜一九二九）は越後中之島村の生まれ。大竹貫一と実の兄弟。幼くして出雲崎町柿木村の庄屋の養子になる。分水の著名な南画家・富取芳斎に学び、ついで長崎まで赴き画道に励んだ。二十五歳で帰郷後、地元の学塾を経営しつつ画作に親しんだ。昭和四年、七十二歳没。

制作年は「庚申」の記述から大正九年（一九二〇）、久須美雪堂の古稀を祝つて贈つたもの。教養のある名家の主人同士が書画詩歌を寄せ合い交流をもつていた当時の世相がしのばれ、興味深い。

雅号の下「諒」は、本名諒作にちなむ。制作した場所「雲烟養寿山房」は、湘江のアトリエ名。

画趣はあたかも淡彩が付された如く、墨に幾種かの色あいが感じられ、その濃淡の滋味な世界を味わいたい。

中林梧竹書 久須美祐伸墓誌銘

久須美祐伸君墓誌銘 正二位勲一等伯爵大隈重信題額

君諱祐伸通称三郎號霞外 其先出於曾我祐成 按家系祐成斬父鎌工藤祐経而身亦死 其妻某氏方娠通来上州白井分娩生男 称久須美祐寛 匿越後三嶋郡逆谷村 祐寛九世孫祐安延德中移居同郡小嶋谷村 十六世祐政享保中事稲葉左衛門 稲葉氏幕府麾下土食邑在郡中祐政管邑政 二十一世曰祐良實君考也 祐良有三男二女

長曰祐序次曰祐利 君其三子也 以文政五年二月一日生 幼聰敏

讀書善詩 長有大志 遊江都從學于朝川善庵業益進 會主家財

計窮蹙以君管邑政 而久須美氏亦不幸家道頽衰 兄祐序以君為嗣

於是兄弟戮力協議一意綢繆家道漸復 當時郡邑納租多用米穀

君乃建議變米納以為金納一舉而上下得利 戊辰之際慨然唱勸王大

義奉其主屬管軍 稲葉氏得以不廢者君之力也 王師入越後府都督

楠田英世重君為人 言於大隈參議因亦得參議知遇 當時王化未遍

遐陬而能使人心知所嚮 君亦與有功焉 君又夙知越後石油之利

首倡採掘議 經營雖未成 其創業之功不可沒 壬申八月應柏崎縣

辟出為大區長 宰三嶋全郡所轄七万石治 聞縣中既而縣廢合併新

潟縣新潟縣大區不置長小區置戸長 君為戸長將辭免 偶獲病平於

家明治九年二月七日也 享年五十有五 葬村中先塋之次 君有二

男五女以男尚幼養兄子祐啓為嗣 亦有名望云里人久須美作之助等

慕君之德 而建此碑銘曰 治家家治 治邑邑治 唯其無私 故能

成私牛刀割雞 何顧人嗤 盡心奉職 請觀銘辭

明治四十一年歲在戊申十一月 勅選議員正四位勲三等文學博士重野安釋撰 中林隆經書

梧竹八十二歳の書。これまで『三島郡誌』（S12刊）の挿図「石碑」の条に紹介される位である。

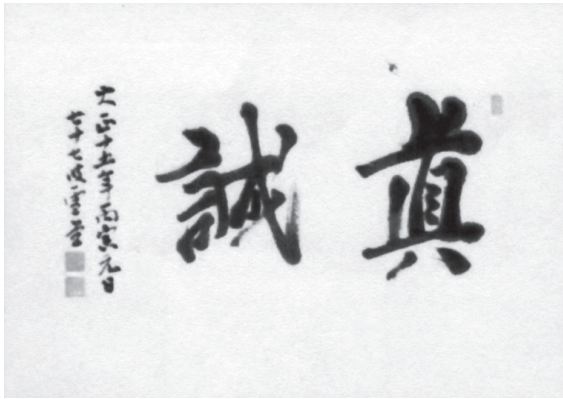


図10 雪堂「真誠」扁額

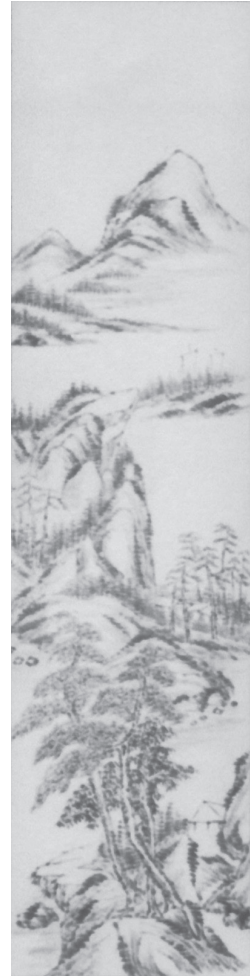


図9 雪堂 水墨山水図



図11 「墨竹図」扁額